平成２７年度　国立赤城青少年交流の家　教育事業

あかぎサンサンかがやきキャンプ
報　　告　　書

国立赤城青少年交流の家では教育事業「あかぎサンサンかがやきキャンプ」を，７月・９月・１１月・１月の計４回実施しました。

この事業は，障がいのあるなしに関わらず，体験を通して物事への興味をもつことや，チャレンジすることの楽しさを学ぶこと，障がいのある子がそれぞれの地域で同年代の子と共に学び育つ機会の足がかりをつくること，スタッフが講義・実施・ふりかえり等のプログラムを経験することで，障がい者への理解や実践的な指導力を身につけることができるようにすることを目的としました。また，青少年教育施設への障がい児教育の発展を目的とし，２回目・３回目は伊勢崎市青少年育成センターとの共催事業として実施しました。

参加者は全４回の合計が４１名で，県内様々な地域から参加し，リピーターの方も多く見られました。リピーターの参加者は複数回関わりを持つことで，参加者の成長を見ることが出来ました。

【スタッフトレーニングの実施：平成２７年６月２８日（日）】

キャンプを実施するにあたって，「スタッフとしてどんな心構えで，キャンプに臨んだら良いんだろう。」「そもそもキャンプってどんなことをするのだろう。」「障がい児と関わるときに気をつけたほうが良いポイントは？」などの不安を減らすために，慶応義塾大学体育研究所の野口和行氏を講師に迎え，「キャンパーの個性に合わせた自然体験活動を楽しむために　～ 基本とグループワーク～ 」というテーマで，スタッフトレーニングを行いました。

講義では，キャンプの基本の部分（キャンプでのスタッフの役割とその意味を知ることで，キャンプをやる意義を学んだり，キャンプでの安全管理を危険予知トレーニングを用いて考えたりしました。）と障がい児キャンプを想定した対象者理解の部分（障害の種類や特性を理解するためのワークをしたり，実際に昨年あった事例を用いたワークをしました。）を重点的にトレーニングしました。

講義を終えたスタッフからは「障がい児とどう接したら良いかわからなくて不安だったが，その子自身と向き合うことが大切なのだと学べた。」「正解はなく，人と違う意見でも良いということがわかった。」「この学びを早く１回目のキャンプに活かしたい」などの声が上がりました。

参加者が楽しむためには，スタッフが楽しめること（≒安心して活動や支援を行える≒心の中の不安が少ない状態）が大切だと，改めて知ることが出来ました。

【１回目実施：７月１１日（土）～１２日（日）】

１回目は，夏の楽しい思い出をつくることができるように期日を設定し，会場は国立赤城青少年交流の家にて実施しました。

今回のメインプログラムは「テント泊」です。テントで生活することで，自然とより深く関わること，普段の生活とは異なるちょっと不便な生活から周りの友達との協力の重要

性を学ぶことをねらいとして実施しました。

はじまりの会では，自己紹介をしたあとにゲームを行い互いの気持ちを和らげて今後の進行がスムーズに行くようにしました。初めて参加した友達は緊張気味でしたが，時間が経つに連れて，笑顔も増えて打ち解け合えるようになっていきました。

そのあと，本日の寝床になるキャンプ場に移動し，自分達でテントを立てました。自分達で立てたテントにみんな満足そうでしたが，数人は夜を想像したのか「本当にここに寝るん？」と不安そうでした。「そうだよ。みんなで一緒に寝るんだよ」と言ったら，「みんなとならこわくないね」と言っていました。

夕食はみんなで力を合わせてカレーを作りました。一番人気は火起こし係でしたが，それぞれ自分の役割をしっかりと頑張っていました。カレーがあまり好きでないと言っていた子が完食したのを見た時はキャンプのパワーを感じました。

その後はキャンプファイヤーを行い，みんなで火を囲んで楽しく歌って踊りました。点火の儀式では４人が火付けのお手伝いをしてくれました。自分から積極的にキャンプファイヤーに参加することで，参加者同士の仲も深まりました。

２日目は，マスのつかみどりと水遊びをしました。マスのつかみどりでは，生きた魚にびっくりしていましたが，自分達でしっかりと内臓を処理して，串を打って，焼いて食べました。サンサンキャンプではやれることは何でも自分達でやります。最後にみんなで思いっきり水を掛け合っていっぱい遊んだあとに，スイカ割りをして終わりました。

子ども達同士が楽しむ時も頑張る時も，みんなで協力しながら取り組んでいたのが印象的でした。

〈事業の様子１回目〉

寝床は自分達で確保します。

食材切りは女子が大活躍でした。

火起こしは男子に大人気でした。

テントの中は意外と広いです。

キャンプファイヤー。

魚は自分でさばきます。

協力して美味しい塩焼きに。

水遊びは一番盛り上がります。

【２回目実施：９月１２日（土）～１３日（日）】

２回目は，夏の終わり・秋の始まりを感じられるように期日を設定し，県内青少年教育施設への障がい児教育の理解を深めるために会場は伊勢崎市青少年育成センターにて実施しました。

今回のメインプログラムは，「自分達で作る流しそうめんコース・竹の器づくり」です。既存のものに頼らない，自分達で１から作る経験をすることで，作ることの楽しさと困難さを学ぶことをねらいとして実施しました。

最初のはじまりの会では，初めての子達が早く打ち解けられるように，子ども達同士のふれあいを大切にしたゲームを実施しました。その後「自分の興味のあることを自由にやろう」をテーマに，自由遊びで火を起こしてマシュマロを焼いたり，キンボールをしたりしました。

夜はグループに分かれて公園を探検しました。その中で，スタッフから渡された地図を頼りに指令書を見つけ，課題を解決していくゲームも行いました。

２日目はいよいよ流しそうめんです。まずコースを作るための竹を割り，残った竹で自分の器を作ります。ツルツルすべる竹に苦戦しながらも，みんなで協力して世界に１台だけのコース・世界に一つだけの器を作っていました。自分達の作ったコースで行う流しそうめんはとても白熱しました。そうめんだけでなく，トマトやゼリーが流れてきてビックリでした。（子ども達はもっと色々なものを流したかったようです。）

そのあとは室内に入ってデザートの巨大プリンを食べて，丸太を輪切りにした土台を使っての写真立て作りをして２回目のキャンプが終わりました。

〈事業の様子２回目〉

はじまりの会での様子。

自由遊びの様子。

夜の公園で探検をしました。

来た時よりも美しく。

器もコースも全部みんなで力を合わせて作りました。とても楽しかったです。

顔の大きさほどのプリンも作りました。

丸太を輪切りにした写真立てづくりです。

【３回目実施：１１月１５日（日）】

３回目は，秋の深まりを感じられるように期日を設定し，会場は２回目と同じく伊勢崎市青少年育成センターにて実施しました。

今回のメインプログラムは，「焼きいも作り」です。秋の味覚を味わうこと，火のあたたかさを感じることをねらいとして実施しました。

はじまりの会では，歌を使ったレクリエーションを行い，音のある楽しい雰囲気づくり・スタッフとだけでなく子ども達同士が楽しめる雰囲気作りを心がけました。

今回の焼きいもづくりは，当日の朝まで雨が降っていたため，落ち葉ではなく薪を使っての焼きいもに変更しました。薪の準備は重くて大変だったけれど，みんなで協力して行えました。その後，顔の大きさほどあるいもを，濡らした新聞紙とアルミホイルで包んで準備はＯＫです。

点火をしてから焼き上がりまでの間，時間が空くので，お昼ごはんを食べたあとは自由遊びの時間にしました。燃やしたいものを拾ってきて燃やしたり，枝をノコギリで切って木の名札を作ったり，思い思いの時間を過ごしました。その中で，木の名札作りをして，自分の作った作品を見せ合っている子達の姿がありました。自然と触れ合いながら子ども達がコミュニケーションを取れていることがとても印象的でした。

いよいよ焼きいもの完成です。焼き上がったいもを取り出すときに熱さにビックリしている子もいましたが，焼きたてホクホクのいもの美味しさに感動している様子でした。

おわりの会では，１日の感想をみんなの前で発表したり，みんなで歌を歌って楽しい雰囲気でした。帰り際，参加者同士が「また会おうね」と約束をしていました。

〈事業の様子３回目〉

薪の準備も全員で行います。

顔ほどの大きないもが今回のメインです。

点火式では５人が頑張ってくれました。

自由遊びで木の名札を作りました。

マシュマロ焼きもやりました。

焼きいも完成。仕上がりチェック中です。

みんなでいただきます。甘かったです。

終わりの会で感想を発表してくれました。

【４回目実施：１月３０日（土）～３１日（日）】

４回目は，冬の自然を満喫できるように期日を設定し，会場は国立赤城青少年交流の家にて実施しました。

今回のメインプログラムは，「雪遊び」です。冬は厳しさだけでなく楽しさがたくさんあるということ，それを体験を通して学んでほしいことをねらいとして実施しました。

はじまりの会では，前回に続き歌を使ったレクリエーションと全員が関わりを持つことのできるゲームを行い，楽しい雰囲気づくりを心がけました。

宿泊室に行く道中で行った館内探検では，班で協力して地図を見ながらチェックポイントを探し，そこに書かれた司令を解決しました。地図を持つ係や道を決める係など，自然と役割分担が生まれていておもしろかったです。

部屋で少しゆっくりしたあと,本日の夕飯のおまんじゅう作りとお鍋作りを行いました。おまんじゅう作りでは，生地作り・包み・蒸しなどの工程をみんなで楽しみながら作りました。チョコやお肉など６種類のトッピングを，シンプルに作る子もいれば，ブレンドして不思議な作品を作る子もいました。お鍋作りでは，野菜の下ごしらえ・味付けを分担して，みんなで一つの鍋作りを行いました。野菜は不揃い，入れる順番もいい加減でしたが，みんなで１つのことに向かう姿勢，協力している姿はとてもカッコ良かったです。

夜はお部屋の中で絵本の読み聞かせをしました。ゆっくりと落ち着いた時間を過ごすことが出来て，グッスリと寝ることが出来ました。

２日目は赤城山の山頂にある赤城山第１スキー場へ行き雪遊びをしました。新雪のところは雪がフカフカなので，みんなで埋もれて遊びました。そりコースではスノーチューブやそりを使っておもいっきり遊びました。帰りの合図を出した時は「もう終わり？」「も

う帰るの？」という声がたくさん聞かれました。時間は短かったけれど，その中で自分だけでなく「一緒に遊ぼう」とお友達を誘う姿が見られ，数に限りのある遊具を譲り合って使っていました。「楽しい」をみんなで分かち合える関係はとても素敵でした。

交流の家に戻り，ネイチャークラフトを作りました。色紙に集合写真を貼り，その脇に好きな木の実をつけて，最後に友達やスタッフに寄せ書きしてもらい完成です。友達との別れを惜しむように，ありがとうの言葉を綴っていました。

終わりの会は，グループからの感想を述べる場面やみんなで歌をうたう場面では，本当にみんな積極的で，自分から進んで人の前に立つ子がたくさんいました。お互いに心を許しあえる，とても良い仲間に巡りあうことができたんだなと，素直に感動させられました。

〈事業の様子４回目〉

館内探検。協力して答えを探します。

粉まみれになりながら奮闘しました。

お鍋の野菜も自分達で切ります。

手作りのおまんじゅうに大満足。

自分でスタート位置まで運びます。

冬の自然は楽しさ満点です。

道具は順番に平等に使います。

メッセージを書いてもらいました。

【全４回のキャンプを終えて】

一昨年は２回実施，昨年は３回実施，そして今年は４回実施しました。単に回数を増やせばいいというものではありませんが，保護者の方から「今年は４回もあるんですね。」「いつも笑顔でキャンプのことを話してくれるんですよ」という声を聞くと，より多くの子ども達と一緒にキャンプを行えることはとても嬉しいことです。

複数年継続して参加してくれている子ども達の成長を感じながらプログラムを作っていけることにスタッフがやりがいを感じています。保護者の方からの感謝や激励の声をいただきながら，それをキャンプづくりに活かしていけることが，あかぎサンサンかがやきキャンプに「笑顔のスパイラル」を作っているのだと思います。

保護者の方からは，「回数を増やしてほしい」「もっと色々なことを体験させたい」「永く続けてほしい」などの声がたくさんあがります。

単に回数を増やせばいいというものではないですが，そういった声に応え，このキャンプを実施する意義や意味をしっかりと考えて，誰もが楽しめるキャンプをこれからも継続することと，その裾野を広げていくことを行わなければならないと感じています。障がい者に理解のある人材育成を，キャンプという実践の場を通して行っていくことが必要だと強く思いました。

担当：事業推進室　　江原　智淳，落合　哲郎